

(別紙様式-4)

## デジタルデータを活用した文理融合研究の可能性検討

Investigation of the possibility of interdisciplinary research of humanities and sciences  
using digital data

田中幸恵, 名古屋大学・附属図書館

### 1. 背景と目的

東海国立大学機構では、名古屋大学附属図書館（以下、「附属図書館」）を中心として「東海国立大学機構学術デジタルアーカイブ（<https://da.adm.thers.ac.jp/>, 以下、「機構デジタルアーカイブ」）」を構築し、2024年6月24日に一般公開を開始した。機構デジタルアーカイブは、文理を問わずあらゆる分野のコンテンツを収集対象とし、分野を越えた利活用に資するデジタル画像データ公開基盤となることを目指している。その実効性を確保するためには、主に①広報活動による利用者層の拡大、②機能の充実、③利用者の関心を喚起する魅力的かつ高品質なコンテンツの拡充、の三点を並行して推進する必要がある。

本課題は、附属図書館を中核として、名古屋大学宇宙地球環境研究所（以下、「ISEE」）ならびに名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センターと協働し、これら三点の取り組みを通して機構デジタルアーカイブの機能を実効的に整備・運用することを目的とする。三者はいずれも、デジタルデータの積極的な公開と相互活用、学内他部局との連携をミッションとしており、単独の部局では対応が難しい要素に対して、多様な観点から意見を交わしながら相補的に専門的知見を取り込むことで、機構デジタルアーカイブの基盤整備を多面的に推進できること、さらに将来的な異分野間連携の創出にも資することが期待される。

### 2. 実施内容概要

#### 2-1. 広報活動

##### 2-1-1. 第27回図書館総合展でのポスター発表

日時：2025年10月22日～24日

場所：パシフィコ横浜

報告者：眞野博和, 田中幸恵（附属図書館）

発表タイトル：東海国立大学機構学術デジタルアーカイブの取り組み：文理融合研究を支えるデジタルアーカイブの挑戦

内容：東海国立大学機構 図書館オープンサイエンスプロジェクトチームデータ利活用サブチームとして、機構デジタルアーカイブの概要と本課題における取り組みについてポスター発表を行った。図書館関係者が中心であるが、学外者に対して、広く広報を行うことができる貴重な機会となった。なお、発表に使用したポスターは、名古屋大学学術機関リポジトリにて公開している（<http://hdl.handle.net/2237/0002013552>）。

##### 2-1-2. 名大カフェの開催

日時：2025年11月7日（金）18:00-19:30

場所：名古屋大学Common Nexus

登壇者：加藤弓枝（名古屋大学人文学研究科）、南雅代（ISEE）、田中幸恵（附属図書館）

参加者：33名

内容：2024年度の融合研究戦略課題において実施した、名古屋大学学術研究・産学官連携推進本部 URAとの情報交換会をきっかけに、同部門が展開する「アウトリーチ活動支援制度」の支援を受け、第123回名大カフェ「デジタルアーカイブと旅する和本の宇宙～読んで、さわって、くずし字体験～」を開催した。機構デジタルアーカイブの和古書コンテンツを題材に、文理双方の登壇者が講演を行うことで、一般市民に対してデジタルアーカイブそのものの魅力や、デジタルアーカイブでの古典籍の公開が文理融合研究につながっていくことの面白さを紹介した。

詳細な報告は名古屋大学学術研究・産学官連携推進本部のnoteにて公開されており、当日の投影資料もダウンロード可能である ([https://note.com/nagoya\\_ura/n/n23a2ab741da9](https://note.com/nagoya_ura/n/n23a2ab741da9))。

## 2-2. 機能の充実

### 2-2-1. IIIF対応画像のマニフェスト連携表示機能追加

本機能は、機構デジタルアーカイブ外部で公開されている IIIF 対応画像について、当該画像のIIIF マニフェストURIを機構デジタルアーカイブ内の既存メタデータに登録することで、機構デジタルアーカイブのビューワでその画像を表示できるようにするものである。これにより、機構デジタルアーカイブの所定ストレージに原画像ファイルを格納している場合と同様の操作感で閲覧が可能となる。

機構デジタルアーカイブの現状の課題としてストレージ容量の制約があり、収蔵ファイルの追加にはコスト面・運用面の制限があるが、本機能により、機構デジタルアーカイブのストレージを消費することなく、機構デジタルアーカイブ上で閲覧可能な公開件数を拡大できるようになった。あわせて、将来的に機構デジタルアーカイブがポータルサイトとして機能拡張する可能性を高めることができた。

## 2-3. コンテンツの拡充

### 2-3-1. 新規登録希望者との打合せと機構デジタルアーカイブ運用要項の整備

機構デジタルアーカイブは、その運用要項が未整備であり、現時点では新規コンテンツの正式な受入ができない状況にある。その一方で、名古屋大学人文学研究科および名古屋大学法学研究科の教員から、研究的価値の高い資料について、機構デジタルアーカイブでの公開依頼があり、これを受けて資料の性質、権利処理、メタデータ記述方法等を整理した。これらの検討を通じて、新規登録希望への基本的な対応手順と留意点が明確になったため、これらを反映した運用要項の整備を進めており、2026年4月からの適用を目指して準備を進めている。

### 2-3-2. AI-OCRによる翻刻データ作成

古典籍の利活用促進を目的として、国立国会図書館が提供する「NDL古典籍OCR-Lite」 (<https://lab.ndl.go.jp/news/2024/2024-11-26/>) を用いた AI -OCR翻刻を試行し、くずし字や漢文の知識を有する学生が校正を行うことで精度検証を実施した。作業時間は計74時間（漢文担当4名：計34時間、くずし字担当3名：計40時間）であり、実務レベルでも一定の活用可能性が確認された一方、そのまま提供するには精度が不足するため、注意が必要な部分も明らかになった。

作業が完了した一部ページについては、実際に機構デジタルアーカイブにおいて校正済翻刻データの公開を開始した (<https://da.adm.thers.ac.jp/item/n004-20230901-01580>)。専門家による品質確認済の翻刻データを掲載できたことは、機構デジタルアーカイブにおけるコンテンツの価値と信頼性の向上につながる成果である。

## 2-4. その他

本課題が目指すデジタルデータの利活用促進に関連する活動として、名古屋大学情報連携推進本部・青木学聡教授を中心とする名古屋大学学術PIDサブワーキンググループに、附属図書館が参画した。学内外の学術関連情報（研究者番号、プロジェクト番号、機関リポジトリや機構デジタルアーカイブのコンテンツ、共用利用装置等）に永続的識別子（PID）を付与し体系的に連携させることが、管理・活用の基盤となるとの視座のもと、今年度は学内の主要ユースケースの実態を把握しPID活用の可能性を探るため、学術関連情報を管理する各部署を対象に意見交換とインタビューを実施した。

## 3. 今後の課題と展望

今年度の取り組みにより、機構デジタルアーカイブは一定の認知度を獲得したと考えるが、アウトリーチの継続により利用者層の拡大とニーズ把握をさらに推進することが重要である。

また、翻刻データの提供による検索性・活用可能性の向上を引き続き図る。専門家の校正を経たAI-OCR翻刻データの蓄積を継続するとともに、その効果的な提供形式（機械可読テキストやアノテーション等）と必要な機能の実装の検討を行いたい。

さらに、ISEEを中核拠点とする文部科学省 共同利用・共同研究システム形成事業「学際領域展開ハブ形成プログラム」は、歴史文献等のデータアーカイブ化を志向しており本課題との親和性が高い。成果の相互参照等の具体的な連携を視野に、協働の可能性を検討したい。